



川内小学校だより

ゆずり葉

第22号

平成30年2月7日
桐生市立川内小学校発行



一寸の光陰 軽んずべからず

1月の朝会では、戌年にちなんで、「DOG EAR」(=本のページの角を折ること)の話をしました。実際に犬の耳のある文庫本を見せながら、こんなふう折ることを「犬の耳」と言いますと話したことは前号で紹介しました。文庫本は井上靖の「しろばんば」という小説です。私が「犬の耳」を付けた箇所はおおよそこんな物語です。

主人公の小学5年生の洪作は親元を離れ、郷里の天城山麓の山村でおぬい婆さんと一緒に土蔵で暮らしています。洪作は近くに住んでいる同じ小学校の6年生のあき子に惹かれています。1月14日のどんど焼きの日に子どもたちが集まります。1月2日に書いた書き初めやお正月のお飾りを燃やす行事です。子どもたちが書き初めを火の中に投げ込むと、「それ、開けてはいや!」という女の子の声が上がります。洪作はすぐにそれが誰の声かわかります。あき子の書き初めを、男の子の一人が棒で、火の中の書き初めを拵げようとしていました。そのとき、洪作は書き初めに書かれた「少年老い易く学なり難し 一寸の光陰軽んずべからず」という文字を眼にします。

以下小説の原文で、

そんな文字が洪作の眼には映^{した}っていた。男の子でも書きそうな強い感じの大きな字で、何枚かつなぎ合わせた半紙に二行に認められてあった。少年老い易く学なり難し。この初めの一行の文章だけが、洪作には意味が判った。洪作は身内の引きしまるような緊張を感じた。ああ、少年老い易く学なり難し。洪作はいきなり立ち上がって、土蔵へ帰り、二階へ上がって勉強をしたいような気持ちにさえた。洪作は自分の書初めを火の中へ突っ込んでいる少女を、尊敬の思いで眺めた。今まであき子に惹かれたことはあったが、併し、いまの惹かれ方は全く違っていた。自分にこのような感動を与える文章を書初めに書いた少女への讃歎であり、讃美であった。

どンドン焼きがすむと、子供たちの頭から完全に正月というものはなくなって行った。正月はもう過ぎ去ってしまった一つの事件であるに過ぎない。正月はもう終わってしまったのである。

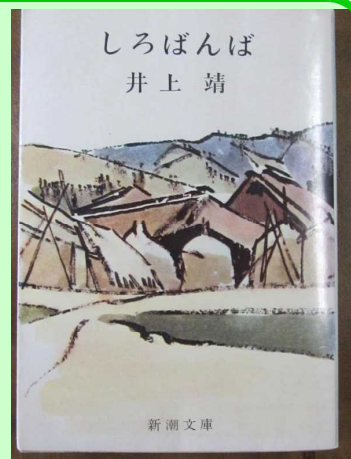
朝会では、この場面を紹介し、わずかな時間でも惜しんで勉強をしなければ、あっという間に時間は過ぎてしまうということをお話しました。

わたしの1冊

四分一 勝

洪作少年の小学校時代の出来事が描かれています。血のつながりのない祖母との関係を中心に、死や没落への悲哀、町の子供へのコンプレックス、離れて暮らす両親への愛憎などが瑞々しく描かれています。中学進学を迎え、洪作は村を離れていきます。人は一人一人、別の道を生きているということを知っていきます。

続編は「夏草冬濤」、「北の海」と三部作です。中1の国語の教科書にも、「赤い実」として載っていました。川内小の図書室にも児童版があります。



▲ 昭和54年に購入した文庫。
現在はもっと楽しい装丁です。